

Newsletter 41

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第41号/2022年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 教養研究センター所長任期を終えて
- 特集Ⅰ 「基盤研究」「学習相談」
- 特集Ⅱ 「情報の教養学」「研究の現場から」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター 実験授業／設置科目】
庄内セミナー／日吉学／身体知／実験授業「エンターテインメントビジネス論」
- 特集Ⅳ 「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」
- 特集Ⅴ 「日吉キャンパス公開講座」「読書会」
「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」
- 活動予定
- 私の〇〇自慢



教養研究センター小菅前所長と片山新所長

教養研究センター所長任期を終えて

教養研究センター所長（2014年10月～2022年9月）
小菅隼人（理工学部）
Hayato Kosuge

この度、四期目の任期満了を迎えるにあたり、八年間務めさせていただいた教養研究センター所長を退任することとなりました。経済学部不破有理教授から所長を引き継ぎ今年まで、八年間という長い時間に、事務方は、吉川事務長から大古殿事務長へと代わり、スタッフも全て交代しました。副所長や各委員長も片山先生と日吉行事企画委員会の石井明委員長のほかは全員が代わりました。また、特に、この二年半のコロナ禍によって社会も大学も大きく変化しましたが、慶應義塾全体がコロナ禍ともある程度つきあっていく覚悟ができた今、私は、これ以上ない後継者の方々がおられるタイミングで所長職をバトンタッチができることはたいへん幸いだと思っています。後任として、法学部片山杜秀教授が新たに所長に就任することになりました。片山先生は、私が所長に就任して以来、設置科目担当として副所長を務めてくださり、また、それ以前には、慶應義塾労働組合で、本部執行委員長・副委員長としてコンビを組みました。片山先生の学識の深さは夙に有名ですが、その事務運営能力も、お人柄もとても優れて、私の遠く及ばないところです。私が八年間の所長職務のうちで、もっとも誇れる仕事は、片山先生に後任をお願いし受諾していただいたことだと思っています。

私の任期中には、極東証券寄附講座や住友生命寄附講座をはじめ、多くの事業が終了しましたが、また、新しい催

事・企画も興りました。特に印象的な三つの事業を挙げさせていただければ、基盤研究の「教養研究会」と「文理連接研究会」そして「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」の増補改訂です。（１）「教養研究会」については、研究講演会と研究シンポジウムというコンセプトで、一般向きの啓蒙講演会とはっきり区別して、多くの人を集めるよりも、「教養とは何か？」という問題について関心の深い方に集まっただき、ディスカッション中心の議論によって思考を深めていく方法をとりました。（２）「文理連接研究会」は荒金直人先生と見上公一先生が現在コーディネーターとして精力的に展開してくださっています。ここで重要なのは、文系と理系の「融合」ではなく「連接」という考え方です。これは、小友聡先生が、世俗と聖性との「接続」が旧約聖書の基本にあると仰せだったと同様に（於「教養研究会」）、文系と理系の場合も同様に、混ぜるのではなく接続をすることが重要だという考え方です。その結果として、文理接続もまた、中心が二つある「楕円構造」となるというイメージを私は持っています。（３）「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」については、2019年から増補改訂版の作成に取り組みしました。そこでは、「スキルズ」を超えて教養の分野まで踏み込んで講演をしていただきましたが、すでに、一万回に迫る閲覧数のあるタイトルもあって、慶應義塾外の機関からもリンクの接続要請が多くあります。

所長を務めさせていただいている間、副所長、コーディネーター、教養研究センター事務室の皆さまはじめ、多くの素晴らしい方々との繋がりができました。それが私にとって最大・最高の宝物です。今後、一所員として教養研究センターの活動に関わらせていただきますので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

基盤研究

文理連接プロジェクト

2022年度の「文理連接プロジェクト」は、昨年度に続き、毎月1回の「文理連接研究会」を行っています。基本的には金曜日の17:00～19:00にZoomで行われますが、より長い時間の対面での研究会も予定しています。今年度の共通テーマは「エコロジー」です。(2020年度と2021年度は「感染」でした。) 今回の新たな試みとして、あらかじめ8名の研究者を指定し、年度末に論文集を作成することを前提に、春学期から様々な議論や中間発表などを行ってきました。異なる分野の研究者が、固有の視点に立脚しながらも、他分野からの言説に刺激を受けつつ、共通テーマについて何をどのように論じることができるのかを探りながら、1年かけて論文を執筆するという形の、緩やかな共同作業を目指しています。

研究会の活動の予定や記録はブログで公開しています(<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>)。参加者は教員と研究者に限定していますが、特に前提知識が必要なものではないので、どなたでも気軽にご参加いただければ幸いです。関心のある方は、ぜひご連絡ください。秋学期は、毎回2名ずつ論文の完成に向けた発表を行い、3月に総括を行う予定です。

(荒金直人)



教養研究講演会 no.6

「西洋文明の源流としての旧約聖書—生きるための知恵を学ぶ—」

【出演】小友聡(おとも さとし) 東京神学大学教授

【企画・司会】小菅隼人

【日時】2022年7月13日(水) 16時30分～18時30分

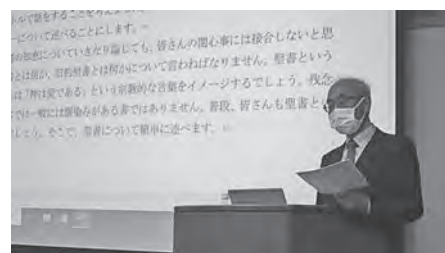
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

日本における旧約聖書学の第一人者である小友聡先生をお招きして研究講演会をおこないました。当日は、コロナ禍にも拘わらず、対面で20名以上の研究者、学生が集まり、活発な議論が行われました。小友先生は、「契約」と「楕円構造」を中心にして旧約聖書を紐解きました。「旧約聖書は西洋文明の源流であり、その知見は現在の西洋文明を決定づけています。(中略) これらを読むと、イスラエルの民がどう生き、どう生きて来たかが見えて来ます」として、特に知恵文学—箴言、ヨブ記、コヘレト書—を取り上

げました。そして、イスラエルの南王国滅亡(紀元前587年)以降のパピロン捕囚という絶望の中で、創世記

が書かれたことにも触れ、現代のウクライナ戦争への一つの考え方も示してくださいました。先生は、最後に、「あらゆることが今、閉塞をして、膠着して、先が見えない現在においてどう生きるか。絶望的状况をどう生きるか、どう生き抜くか。旧約聖書の知恵的思考が示唆を与えてくれるのではないかと思います。このような旧約聖書の知恵的思考が西洋文明の源泉にあるのだということを、皆さんに知っていただきたいと思います」と締めくくりました。非常に活発で有意義な講演会でした。

(小菅隼人)



学習相談

今年度春学期は対面授業が増え、キャンパスに活気が戻ってくると、学習相談にもより多くの相談が寄せられました。具体的には、テーマの決め方、構成の仕方、参考文献や脚注の付け方など、レポートにまつわる相談のほか、レポート執筆と表裏一体である、資料の探し方に関する相談にも多数対応しました。学習相談員としては、学生目線から相談者の悩みや躓きの解決に助力すると同時に、相談を受けるなかで自らの知識や方法論を省み、ときに見直す

形で、慶應義塾の理念「半学半教」を体现できるようにやりがいを感じています。秋学期以降は、SNSの活発な運用にも力を入れ、学生が学習上の悩みを気軽に相談できる窓口として、より精力的に活動をしていきたいです。

(文学研究科 修士2年 小澤里佳)



「情報の教養学」(2022年度春学期)

2022年度春学期の「情報の教養学」では、3件の講演を対面で実施しました。まず、福井健策氏(弁護士)はメタバースをとりあげました。メタバースは現実社会と異なり、しかもその法律が存在しない現状において、個別の問題に既存の法律がどう解釈されるのかについて考察しました。特に、著作権、肖像権、商標権、意匠権をとりあげました。次に、伊藤公平塾長は、情報がありふれている世の中をいろいろな側面から議論しました。便利な人工知能の頼りすぎには弊害があることや、意図的な情報操作、探さないし知りえない情報など、例をあげながら解説しました。そして、自分で考えること、有料の情報の利用、お墨付きの情報の重要性について述べました。最後に、土屋大洋理事は、サイバー空間における話をしました。例として、アメリカの選挙に対するロシアの介入とその阻止、Twitterや偽WWWサイトを通したフェイクニュースの拡散や印象操作



などを紹介しました。また、サイバー空間を可能にしているデータセンターや、通信の中心となっている海底ケーブルの重要性を話しました。いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。秋学期は、3件の講演を対面で実施する予定です。

(高田眞吾)

「研究の現場から」

第34回「第二次世界大戦前・中・後のBBCラジオ放送——リスナーの参加の観点から」

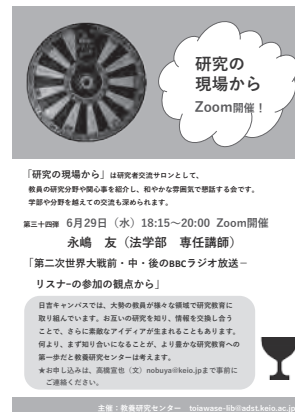
第34回の「研究の現場から」では、「第二次世界大戦前・中・後のBBCラジオ放送——リスナーの参加の観点から」と題して、お話をさせていただきました。

初めに、BBC ワールドサービスの本部があったブッシュ・ハウス(今はキングス・コレッジ・ロンドンの一校舎)やレディングのBBC文書保管センター等の写真を映し、2022年はモダニズムイヤー 100周年であるだけでなく、BBC誕生100周年でもあることを伝えました。次に、1920年代、30年代のBBCのチェロと野鳥のデュエットの放送、実験的ラジオ劇・フィーチャー、リスナー調査・研究等を例に、BBCは草創期から〈ラジオリスナーの参加〉という側面を大事にしてきたことを確認しました。さらに、BBCは、第二次大戦期では、国民の想像力を高め士気を

上げようとするプロパガンダ性を帯びたラジオ劇やフィーチャーを、そして、大戦後も、リスナーの想像力をかき立てる実験的モダニズム的ラジオ劇を多く放送してきたことを確かめました。

日本や海外のラジオ放送やポッドキャストを研究する／好む聴衆の皆さまに恵まれまして、質疑応答では、過去そして現代におけるラジオ放送の重要性を再確認することができました。ご参加くださった皆さまに深く感謝申し上げます。

(永嶋 友)



予告 第35、36回 研究の現場から

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気の中で語り合う催しです。

慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。(高橋宣也)

■第35回：12月14日(水) 18:15～ Zoom開催
越野 剛(文学部)

■第36回：2023年1月18日(水) 18:15～ Zoom開催
浜田 和範(法学部)

■要申込：要
■参加費：無料

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

第11回「庄内セミナー」報告

第11回「庄内セミナー」は、8月30日から9月2日まで举行されました。その「密」な内容のため過去2年は中止でしたが、今回は「待ってました」と応募した学生も多く総勢17名で出かけました。2019年の副題「死から学ぶ生」に、コロナ禍を経て再度向き合うべく「今、あらためて死から生を考える」を副題にしました。初日には、先端生命科学研究所の富田勝先生・理工学部の塚田孝祐先生をお迎えし、未来を見据えた技術について伺い、2日目には一気に過去を遡り即身仏と羽黒の石段を訪れ、東山昭子先生に庄内で大切にされてきた表現について伺いました。3日目の修験体験では湯殿山を目指し、厳しい自然を身体で受け止め、最終日には慶應義塾高校の鳥海奈都子先生と共に素読体験を行った後、4日間グループで議論したことを発表しました。暖かくご支援くださった鶴岡市役所の皆様や実現に向けてご尽力くださった全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

(実行委員長・経済学部 鈴木亮子)

また会える気がします。

厳かな自然に囲まれた庄内セミナーでは、講師の講演を聴き終え、誰かがポツポツと話し始めると、次々と話の輪が広がっていきました。

安心安全で自分達が守られた場であったからこそ互いに受け入れ合い、日頃、目を向けることのない、話にくさを感じる生や死について率直に話し合えたのでしょう。

最終日になると充実感とやりきった感からくる高揚感で、このメンバーで会うことはもうないのだと非常に寂しく思ったのを覚えています。機会があれば、人生の節目で、また集まってじっくりと話し合ってみたい!なんて思う人たちに出会えました。だからやっぱりこれからの人生も捨てたもんじゃない!と思えるのです。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった全ての方々に厚く御礼を申し上げます。

(法学部政治学科3年 中村天音)

五感をフル活用した4日間

今回、私が庄内セミナーに参加した理由は、生きている我々とは正反対の「死から生を考える」というテーマに興味を持ったからです。セミナーでは、体験を通じて「感じる」ことが重視されています。そのため、山伏体験や様々な学部に所属する参加者との交流など、全てのイベントで五感をフル活用することが求められました。特に、印象に残っているのは、山伏体験で行った滝行です。滝行では、「死」が間近にある自然の中に身を置くことで、自分自身が如何にか弱い存在であるかを改めて実感することができました。普段の学生生活であれば、経験できないこと尽くしであった庄内セミナーへ参加できたことは、私にとって大きな財産になったと思います。

(経済学部4年 福田健浩)



実験授業 エンターテインメントビジネス論

2022年度春学期に実験授業「エンターテインメントビジネス論」を実施しました。アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスについて、理論と実務の双方から学際的・分野横断的なアプローチを行うというもので、2023年度から開始する寄附講座の準備段階として位置づけられている授業です。第1回から第3回まではゲストスピーカーの中山淳雄が担当し、第1回「モバイルゲームビジネス概論」で全体のパースペクティブを示した後、第2回「『ソードアート・オンライン』分析」と第3回「『八月のシンデレラナイン』分析」では、業界の関係者へのインタビューをもとに、個別事例の分析を行いました。続く第4回では山下一夫（理工学部）が「日本と中国のアニメーション」、第5回では吉川龍生（経済学部）が「中国語圏映画におけるゲームの可能性」、第6回では三原龍太郎（経済学部）が「日本のアニメビジネスとアジア」と題した講演を行い、最後の第7回ではそれまでの担当者全員で総合討論を行いました。コロナ禍での開催となったため、会場のシンポジウムスペース自体は、かなりの人数を収容することができるにもかかわらず、人数制限を行わざるを得なかったのが残念ですが、毎回の授業では出席者と登壇者の間で活発な議論が交わされ、非常に満足度の高い内容となりました。

(山下一夫)

株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」

「景観編」：町の眺めから何が見える？

今年度の「日吉学」は、コロナ禍のなかではありましたが、完全対面授業で実施できました。「日吉学」は、日吉キャンパス、あるいは日吉をひとつのテキストに見立て、そこから学生自身が何かを読み解いていくというものです。今年度は、日吉の景観という観点から、学生にテキストを読み解いてもらいました。

春学期の前半は、日吉キャンパスの歴史的な建造物や日吉の市街地、日吉記念館裏の蛸谷などを実際に歩くフィールドワークとそれに基づく様々なアクティビティでした。後半は、学生個人々が前半のフィールドワークとアクティビティから引き出した問題を検討し、最終的には4,000字のレポート作成とプレゼンテーションをしてもらいました。

今年度の授業の大きな特徴として挙げることができるのは、反転学習です。従来は、日吉キャンパスの成り立ちなどを講義し、それからフィールドワークに出るという形式でしたが、今年度は、慶應義塾大学出版会の協力のもと、この講義部分の動画を作成し、反転学習に活用しました。学生は事前課題として動画を視聴してから、フィールドワークに臨むようにした結果、これまで講義に使っていた時間をディスカッションやワークショップに充てることができようになり、学生の主体的な学びの時間を確保することができるようになりました。

反転学習の効果については、これから分析する必要があると思いますが、知識を獲得する座学と主体的な学習のアクティブ・ラーニングを両立することができるという点では、今後の学習の在り方の可能性を秘めたものとなるのではないかと思います。

(大出 敦)

春学期特定期間 集中講座「身体知」

2022年の夏に2年ぶりに対面による「身体知」が復活しました。8月15日から20日までの6日間の集中講座に通学生、通信生とも募集人数の2倍の申し込みがあり、対面による交流の授業がどれほど待ち望まれていたのかがよくわかりました。

今回は講師2名に外部の特別講師1名を招いて21名の学生と授業を作り上げました。講師の横山千晶（法学部）が選んだ文学作品3本は「さかのぼる」というテーマに沿ったものです。その解釈をめぐる議論をもう一人の講師、若澤佑典（文学部）がリードしました。身体知の授業はその日の議論と発見が次につながる「生きている」授業です。いまだ感染症の未曾有の危機のただなかにながらもこれまでの経験を「さかのぼり」つつ文学テキストに対峙した参加者の間では、自然と議論は白熱し、予定していた時間を大幅に超えることもありました。しかし若澤がその場で提示される意見をまとめながら議論をリードし、そのあとで特別講師による身体を通した表現へと進むというシームレスかつ波のような6日間に参加者は安心して身をゆだねていくようになりました。

その波乗りを可能としたのは参加者の間に築かれた信頼感と、特別講師であるアーティストの存在です。本年度はコミュニティダンスのファシリテーターを務めているダンサーの寒川明香氏を特別講師に迎えて、感染症対策を踏まえた身体表現と交流を行えることができたことも安心感につながりました。

年齢とバックグラウンドがまちまちの参加者が、テキストを土台として、それぞれの才能をもとに、思う存分自己表現を展開し、互いに認め合い、新たな解釈へと自らを啓いていった6日間。本年度は新型コロナウイルスのただなかで堅固なアカデミック・コミュニティが築かれました。講師もこのコミュニティを大切にしていきたいと思います。

(横山千晶)



日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画 春学期

新入生歓迎行事ワークショップレクチャー「コロナを超えて：コロナ時代のメイクアップ」

【出演】松下里沙子(まつした りさこ)+3名の学生モデル

【コーディネーター】小菅隼人

【日時・場所】2022年6月8日(水)16時30分～18時50分
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

コロナウイルス感染症の繰り返しの流行によって、マスク着用が一時的なものではなく、「環境」となりつつあります。この新しい状況において、私たちはポストコロナを見据えて、キャンパスでも、新しい学生生活のあり方を見つけなければなりません。このワークショップ講演会(申込制50名塾生限定)は、「マスク着用をしながらの状況で、私たちは、メイクアップをどう考えるか」を主旨として行われました。メイクアップ・アーティストである松下里沙子さんは、慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻卒業後、富士通株式会社の営業職を経て「好きなことを仕事に」という思いで脱サラ。単身NYへ渡り、第二のキャリアをスタートさせ、現在、東京とNYを拠点に活躍中です。

当日は、日吉の学生を中心に、定員50名いっぱいの申込みがありました。まず、松下里沙子さんによるパワーポイントを使いながら、メイ



クの歴史、コロナ時代のメイクの意義についての40分の講義があり、続いて、あらかじめベースメイクを施した3人の学生をモデルに、解説付きでメイクアップの実演が行われました。その後、とても活発な50分に及ぶ質疑応答では、メイクそのものに対する質問と、松下里沙子さんの仕事内容に対する質問がありました。メイク技術と共に、松下里沙子さんのキャリア形成そのものが、特に聴衆の興味を引いたと思われます。男性の参加者は3名で、殆どは女子学生であり、女子学生のキャリア講座としての意義も感じさせる催事となりました。

(小菅隼人)

能の流儀 —謡と仕舞—

2022年6月11日(土)14:00～16:00、日吉キャンパス6号館631教室において、HAPPの新入生歓迎行事として、「能の流儀—謡と仕舞—」と題する能楽の二流派の違いを学ぶイベントを開催しました。能楽にはさまざまな流派が存在し、主役を演ずるシテ方には五流があります。しかし、そうした違いを見る機会というのは、なかなかありません。普段の観能や学びではできないことを、慶應で何十年も学生達を指導なさっている観世流・宝生流の先生方をお願いして、教えていただきました。題材は、「あま」(観世流は「海士」/宝生流は「海人」)の「玉之段」のハイライト。女性の「あま」が龍宮にある玉を自分の子供の将来のために命がけで取りに行く名場面「玉取り」を謡と仕舞で比較しました。

公演は、【観世流】坂井音雅(地謡:馬野正基、長山桂三)。
【宝生流】亀井雄二(地謡:澤田宏司、東川尚史)。司会:高橋悠介(斯道文庫)。企画/運営:津田真弓(経済学部)・日本文化研究会。主催:慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会(HAPP)、協力:慶應義塾大学アート・センター。参加者は80名。

詳細はこちら<https://sites.google.com/keio.jp/nichibunken2022kouenkai/> YouTubeでも謡と仕舞の部分の動画を公開予定(慶應HAPP津田真弓研究室)。

(津田真弓)



ライブラリーコンサート2022

ライブラリーコンサートは、今回で7年目となる恒例イベントです。コロナ禍の影響で秋学期にずらしていたのを今回から春学期に戻し、5月20日にジャズ、5月25日に弦楽四重奏のコンサートを開催しました。対面授業の再開でキャンパスには久々の活気が戻り、会場も立ち見を含め多くの塾生で溢れました。このイベントは、塾生が日常的に利用する日吉図書館で、一流の演奏家の生演奏を聴けるという少し特別な体験をすることで、これまで触れてこなかったような分野の音楽へも関心を広げ

てほしいといった思いから続けてきたものです。実際にこのイベントがきっかけで演奏者のコンサートに通うようになったという嬉しい塾生の声もあり、文化・芸術への関心のきっかけ提供の役割を果たせたのではないかと考えています。

(日吉メディアセンター 今井星香)



日吉キャンパス公開講座「舞台裏のストーリー」

2022年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え48回目の開催となり、9月24日から12月10日までの日程を組みました。統一テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての養塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことを目標にしています。2020年度はやむなく中止とし、2021年度は対面での実施にこだわりながらも定員を限定しましたが、2022年度は、ほぼコロナ禍前の定員に戻し、2021年度と同様、広めの教室を選び、前年度並みの感染対策も実施した状態での開催としました。

コロナ禍という不透明・不安定な状況が続く中、受講申し込みが低調になることも想定されましたが、募集開始10日程で定員に達し、全5日間のうちの4日間を完了しております。

統一テーマを「舞台裏のストーリー」とし、10講師（塾内6名、塾外4名）による各90分の講演が行われ、分野は時事・社会問題・地理歴史・メディア・職業・キャリア・文学・宗教・医療・芸術・スポーツ・環境・生物科学等、特定の分野に偏ることなく多岐に渡るようにしました。

各回の講演者やタイトルは右表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただきますと、過去の実施分についても記載がございます。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/exchange/open/>

(寺沢和洋)

講義日	講師	テーマ
9月24日 (土)	3時限目 白井さゆり	ウクライナ戦争、世界経済、エネルギー政策の舞台裏
	4時限目 廣瀬 陽子	ウクライナ危機—ロシアの侵襲決定と苦戦の舞台裏—
10月22日 (土)	3時限目 室山 哲也	TVディレクター40年 私が出会った“偉人”達
	4時限目 小菅 隼人	シェイクスピアの舞台裏
10月29日 (土)	3時限目 羽田 功	ユダヤ人の歴史は裏？表？
	4時限目 原 浩之	クラシックホールの舞台裏—健康産業の会社が持つ都内随一の音響ホールの成り立ち—
11月26日 (土)	3時限目 須田 芳正	ドイツサッカー強さの舞台裏
	4時限目 中川 寛子	路線図から見る、街の表と裏
12月10日 (土)	3時限目 岡 浩太郎	生命現象を「見える」化する—生命研究の舞台裏？舞台裏？—
	4時限目 岩波 敦子	歴史像の光と影—歴史の舞台裏を考える—

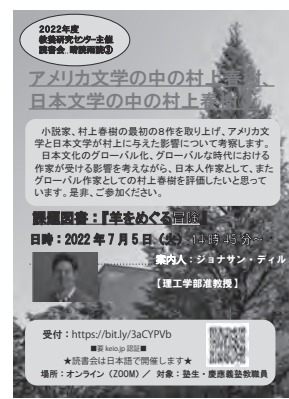
※公開講座は中止・延期となる可能性があります。

読書会「晴読雨読」

「村上春樹を読む」

今年の春学期、村上春樹の小説に関する読書会を主催する機会を得ました。村上の最初の三作、『風の歌を聴け』（1979年）、『1973年のピンボール』（1980年）、『羊をめぐる冒険』（1982年）を取り上げました。3回の議論の焦点は、村上春樹が受けたアメリカや日本の小説の影響であり、F・スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、三島由紀夫など、さまざまな作家の影響を探りました。アメリカの作家の議論の多くは、私の最近の著書Haruki Murakami and the Search for Self-therapy: Stories from the Second Basement (Bloomsbury Academic, 2022年) からきています。日本の作家に関する議論は、私が現在行っている研究に基づいています。

最初の読書会は対面で行いましたが、出席者が少なかったので、次の2回はオンライン形式に移行し、毎回20～30人の学生が参加してくれました。私が課題小説について45分ほど講義し、その後45分ほど質疑応答とディスカッションをするというものでした。読書会は秋学期も続き、新たに『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（1985年）、『ノルウェイの森』（1987年）、『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995年）の3つの小説を取り上げる予定です。また、学生の皆さんと交流できることを楽しみにしています。



アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ

教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」では、自分で問題を発見し・調べ・発信する力を実践的に習得します。その心得をだれでも学べるよう、教養研究センター所員がテーマを設けて約10分語るビデオ講義を制作し、センターのホームページを介して公開しています。

2013年度に一度、一連のものが作られましたが、内容・陣容を2020年度に刷新し、新たに15本が制作・公開されました。2021年度に引き続き、本年度も新たに追加され、今後、配信が予定されています。2021年度以前の講義ビデオにもホームページからアクセスできます。学生諸君にとってレポートや卒業論文執筆の参考になるとともに、広く一般に学術研究に臨む姿勢について、指針となることが期待されます。また、リモート学習に資する教材にもなります。この10分講義は過年度に公開された際に、学外からも高い関心が寄せられ、参照の打診も受けています。

10分講義ビデオは教養研究センターのホームページからご覧ください。

(高橋宣也)

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

<今後の配信予定>

「未来を考えるための科学史」 見上公一（理工学部 准教授）

「サブカルチャー研究」 新島進（経済学部 教授）

「映画は読むことができるのか？」 佐藤元状（法学部 教授）

「ロシア語について」 越野剛（文学部 准教授）

※タイトルは変更になる可能性があります。所属・職位は公開当時のものになります。

創造力とコミュニティ研究会15
土に触れ、空気に触れ、人と繋がる
8月23日(火) 19:00～20:00 カドベヤ

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第5回：エコロジー論の中間発表(2)
9月30日(金) 14:00～17:00
日吉キャンパス来往舎中会議室

【HAPP】日吉音楽祭2022
11月6日(日)、11月26日(土) 14:00～
日吉キャンパス協生館・藤原洋記念ホール

【HAPP】新入生歓迎行事 笠井毅舞踏公演
10月19日(水)

【HAPP】教養の一貫教育Vol. 5「Voix/Voie吉増剛造
×大友良英
詩と音楽の交差するところ2」
10月21日(金) 15:15～ 日吉協育ホール

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第6回
10月28日(金) 17:00～19:00 オンライン開催

創造力とコミュニティ研究会16
命をいただくということ～そして私は獵師になった～
11月15日(火) 18:30～20:00 カドベヤ

【情報の教養学】第5回：安宅和人
「時代と知性を考える」
11月16日(水) 16:30～
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【研究の現場から】第35回：越野剛
12月14日(水) 18:15～ オンライン開催予定

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第8回
2023年1月6日(金) 17:00～19:00 オンライン開催予定

【読書会】「晴読雨読」第5回：ジョナサン・ディル
2023年1月17日(火) 14:45～16:15 オンライン開催予定

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第10回
2023年3月13日(月) 14:00～17:00
日吉キャンパス来往舎中会議室

8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月

庄内セミナー
8月30日(火)～9月2日(金) 山形県鶴岡市

【日吉キャンパス公開講座】舞台裏のストーリー
1回目：9月24日(土)、2回目：10月22日(土)
3回目：10月29日(土)、4回目：11月26日(土)
5回目：12月10日(土)
13:00～16:15 日吉キャンパスD101教室

【実験授業】スポーツ・インテグリティ
～祝福される先導者に求められるもの～
1回目：10月3日(月)、2回目：10月17日(月)
3回目：10月24日(月)、4回目：10月31日(月)
5回目：11月7日(月)、6回目：11月14日(月)
7回目：11月28日(月)
18:10～19:40
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第4回：栗原聡
「考える草とAIとの共進化」
10月26日(水) 16:30～
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【読書会】「晴読雨読」第4回：ジョナサン・ディル
11月1日(火) 14:45～16:15 オンライン開催

【基盤研究】教養研究講演会no.7：近藤勝彦
「キリスト教は『世界』をどう取り戻すか—救済宗教のakosmismを超えて」
11月16日(水) 16:30～ 日吉キャンパス来往舎大会議室

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第7回
11月25日(金) 17:00～19:00 オンライン開催

【情報の教養学】第6回：満倉靖恵
12月7日(水) 16:30～
「デイリーセンシングで賢く自分らしく生きる
～生体信号を用いた感情認識から病気の予兆検出まで～」
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【研究の現場から】第36回：浜田和範
2023年1月18日(水) 18:15～ オンライン開催予定

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第9回
2023年2月3日(金) 17:00～19:00 オンライン開催予定

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

私のマテ茶自慢

ラテンアメリカ文学に親しみはじめた頃、小説に出てくるマテ茶なるものの記述が妙に気にかかりました。ひょうたんから作った器に茶葉を入れてお湯を注ぎ、金属のストローを挿して吸う。しかも回し飲みが常だという。アルゼンチンを訪れた際、瀟洒な街並みの随所に出没するひょうたんに目を見張りつつ、同時に「自分が求めていたのはこれだ」と閃きました。勉強中でも机を離れることなく温かい飲み物にありつけるうえ、覚醒効果もあるし食物繊維を直接取り込むのでお腹もスッキリ、とかなりQOLが上昇したように思います。現在使っている器(器のこともマテと呼ぶ)は、アルゼンチンのお隣でやはりマテ茶大国のウルグアイに住む友人が贈ってくれたもの。内部がガラス製で洗いやすく、日常使うには最適です。近年サッカーや「世界一貧しい大統領」ホセ・ムヒカのおかげでウルグアイの知名度が急上昇したおかげか、片手にマテを握りしめ、もう反対の脇に魔法瓶を挟みながらキャンパスを歩いても、特に不審がられてはいないようです。もちろんコロナ禍の真っ只中、当地でも回し飲みは厳禁となっている模様。気兼ねなくマテを受け取り、談笑できる日は戻ってくるのでしょうか。(法学部 浜田和範)

